

主人公の妊婦の咲と咲を支える夫の祖母タミエの物語

しょうじゅじ

法華宗立石山 松寿寺〔岡山市〕

当寺は、興国2年（1341）に、南朝方の武将多田頼定の霊を弔うため、その嫡子能勢太郎頼仲の発願により創建された法華宗の寺院で、大覚大僧正を開祖とする。

「松寿寺パンフレット」より



きしもしん

鬼子母神 えんじゅ（槐）

現在の本堂は、文政9年（1826）の建立であるが、この本堂前にえんじゅの巨木がある。

幹が二つに分かれ空洞を生じているが、寺伝によれば延享元年（1744）、この空洞から光明を放って鬼子母神像が出現したので堂を建ててその像をまつている。この鬼子母神像に祈願し、護符を服することによって子供に恵まれ、また安産すると信じられ、寺の名木になっている。

現地説明看板より



松寿寺にあるえんじゅの木空洞をくぐると、子を授かったり、安産になったりすると言われている。タミエは死産の一年後にえんじゅの木をくぐろうとしたことを思い出す。まだあの頃は柵がなかったのだが、タミエの腰では通る自信がなかったので、諦めて帰ったのだ。今は天然記念物になって柵が設けられ、くぐることはできなくなっている。咲くらしいの体型なら通れたらうにと、タミエは思う。

祖父母の家でのひと夏の
友情と秘密

ひろ ど かせ

広戸風〔津山市〕

那岐山、滝山、広戸仙、山形仙の南の山麓一帯に起こる局地風を「広戸風」と呼んでいる。風速50mを超えることもある。「広戸風」がいったん吹き荒れると農作物に大きな被害を受け、家屋が倒壊するなど人々の暮らしに大きな影響がある。

「津山市公式サイト」より

那岐山〔勝田郡奈義町〕

氷ノ山後山那岐山国定公園にも指定されている中国山地の秀峰で、四季折々の豊かな美しい自然に恵まれている。

頂上からの眺めは、何も遮るもののない360度の大自然で、天気の良い日には西には大山、東に氷ノ山、北には日本海、そして南には遠くの四国の山々まで見渡すことができる。

「奈義町観光サイトHP」より



写真提供 岡山観光連盟

普段は端に寄せてある雨戸をひっぱり出し、立てつけを調整したり、屋根にはしごを掛けてテレビのアンテナを補強する。きびきびした姿の祖父を見るのは初めてだ。

「なんなの？」

海彦は不安げに、それでも興味を隠しきれず祖父母の行動を手伝いながらたずねる。

「広戸風さ。しっかり用心しないと飛ばされちゃう」

広戸風はこのあたり特有の局地的な暴風で、四国沖を通過する台風や発達した低気圧の影響でおこる。

船頭のせつない恋心
を描く

船頭としての暮らしが始まった。
高瀬舟は何艘かで連れだってゆくことが多かった。
一艘にはトモ、ナカノリ、オモテと呼ばれる船頭が三
人が乗り、たいていは親子や親族だった。叔父の舟に
は、叔父と直吉が固定で乗り、もう一人はときどきで変
更になった。

高瀬舟〔高梁市〕



再現した高瀬舟
高梁観光駐車場前

岡山県内を流れる吉井川・旭川・高梁川の三大河川は、古代以来舟路として利用され、物資の輸送のために重要な役割をはたした。中世後期には林野・津山（吉井川）、勝山（旭川）、松山（高梁川）から、瀬戸内の港までの高瀬舟の舟路が開発されていたと考えられている。

高瀬舟は全長が12～15㍍、幅2㍍程度の船底が平らな木造船で、30～50石程度の荷物を積むことができた。

江戸時代に河川交通は飛躍的に発展した。中国山地を越える南北方向に陸路は三大河川の上流で交差した。勝山・久世・落合（旭川）、新見・松山（高梁川）などの河岸（川湊）に集められた年貢米や、薪、たばこ、鉄、和紙などの地域の諸産物は、高瀬舟に積まれて下流の瀬戸内海沿岸の港へと運ばれた。

『新見・高梁・真庭の歴史』郷土出版社より

備中松山城



備中松山城天守

現在残された備中松山城天守は水谷勝宗の築城によるものである。平成9年（1997）、五の平櫓、六の平櫓をはじめ、4ヶ所の門、土塀が復元され、本丸部分の往時の姿がほぼよみがえった。

『新見・高梁・真庭の歴史』郷土出版社より

北へむかえば山にいたり、城があるときいていた。川岸の船頭道は無骨な石でまもられているが、城は大きなうつくしい石でまもられているらしい。
水音にいざなわれ、林の細い道へはいりこむと木漏れ日がつくしかかった。

薬屋を営む家族の物語

備中売薬 [総社市]

都窪郡や隣の浅口郡など、備中の国と呼ばれていた地域では昔から薬を作っている家が多く、地方の名を取って備中売薬と呼ばれている。この村では作業所を構えている家だけでも五十を数える。



備中売薬

総社市まちかど郷土館 展示室

売薬には、昔からいろいろな販売方法があり、薬舗で売る方法、僧侶や香具師（歩き医者とも呼ばれ居合抜きやこま回しなどを演じて人を集め薬を売る人）などによって行商される方法、置薬（家庭配置薬）の3つの方法が用いられていた。

宝暦3年（1753）に書かれた本には数種の薬が名物として紹介されており、総社市を中心とする備中売薬の起源は、それより前の元禄時代に遡ると考えられている。

初めはその土地の庄屋や有力者の家に配置する「大庄屋廻し」の方法で販売しており、その後、次第に一般の各家庭に置くようになっていった。

配置人（張主・売子）は、主として農閑期に懸場（得意先・販売先）を回り、預けていた売薬のうち消費した分を集金し、再び一定量を預けて廻った。

「総社市まちかど郷土館パンフレット」より

総社市まちかど郷土館

総社市にある「総社市まちかど郷土館」の二階には「備中売薬」「阿曾の鋳物」「い草・畳表」などの明治から昭和に栄えた総社の主要産業を展示している。特に売薬の関連の資料は全国的にも貴重なものが多く、全国屈指の資料数を誇っている。これらは、昔の産業や暮らしを知る上で貴重な資料となっている。

「総社市まちかど郷土館パンフレット」より



総社市まちかど郷土館



総社市役所前に立つ
備中売薬のモニュメント
「紙風船飛んだ」